

独立行政法人国立国語研究所「外来語」委員会 第1回
議事要旨

1. 日時 平成14年8月7日(水) 14:00 ~ 16:00
2. 場所 国立国語研究所会議室
3. 出席者 甲斐委員長, 相澤委員, 阿辻委員, 加藤委員, 倉島委員, 古賀委員, 柴田委員, 陣内委員, 関根委員, 田中委員, 中西委員, 中山委員, 長谷川委員, 福田委員, 松岡委員, 水谷委員

4. 会議の概要

(1) 所長挨拶

所長から,最近の国語審議会・文化審議会において,一般に定着していない外来語の安易な使用への懸念と読み手への配慮の必要性が示されていること,文部科学大臣から外来語の安易な多用について何らかの対応が考えられないかとの提案があったことを受け検討を重ねた結果,公共性の強い場で,なじみの薄い外来語が使われていればそれに換えるべき分かりやすい言葉や表現として,どんなものがあるか検討し,緩やかな目安・よりどころとして提案することを目指す委員会を設けることとした経緯と設立の趣旨が説明された。

(2) 委員長等の承認

委員長として甲斐所長,副委員長として中西委員,水谷委員が承認された。

(3) 委員会等の進め方

一般への定着度が十分でなく分かりにくい外来語について,年2回分かりやすい言い換えを世に提案する,当面はまず国の省庁の白書等を主な対象とする,委員会には作業部会を置く,第1回の言い換え提案は本年12月を予定することなどを決めた。

(4) 会議での主な意見

外来語は多様な文化を受け入れる一つ的手段でもあるから,和語と漢語と外来語とのいい関係を築けるような方策が出てくることを期待する。

日本文化は外来文化によって成り立ってきたような経緯があり,言語は文化の記号でもあるので,それがどれくらいの形において日本人の精神に寄り添う言葉になるのか,そのあたりのところが問題であろう。

「デイスサービス」とか「ショートステイ」といった言葉を新聞などでよく見かける。それぞれ「通所介護」「短期入所」という言い換え語が付けられているが,実際の現場で使われることはほとんどなく,「通い」「泊まり」というような言葉が使われている。もし言い換え提案をするのであれば,できるだけ使っていただけるようなものを考えていきたい。

科学の分野は先端のところではもうほとんど90パーセント位,英語で動いており,それをどのようにきれいな日本語に換えて定着させるのかというのは大きな問題。

新聞はこの半世紀以上,読みやすい記事表記,意味内容の分かりやすい書き方を追い求め,これは漢字の使い方を考えるといった形で行われてきた。今日,問題になってきているのはカタカナで書かれる外国語の問題ではないかと思う。新聞は新しい考え方や事象を真っ先に紹介しようとする習性があり,専門の人々が身内だけで使ってい

る言葉を紙面で紹介せざるを得ないことがありカタカナ語の分量が多くなる。分かりやすく表現するにはどうしたらいいのか常に考えていかなければならない。氾濫状況との指摘がよくあるが実態の把握がまだきちんとした形でなされていないように思われ、そういった調査の必要がある。

英語のカタカナ語が多いが、間違っただ英語、間違っただ言葉を私たちに覚えさせてしまう困った副産物がある。海外の人達から日本語でいちばん分からないのはカタカナ語ということをよく聞いており、考えなければならない。

明治の時代と違って今、日本語の中での漢字や漢語の造語能力はいったいどれくらいあるのか。それでは大和言葉は置き換えてやっていくだけの要件、国民に支持される条件を備えているか。本当に誰もが使ってくれる案を出せるのか。言い換え案を模索するのは容易ではない。

カタカナ語がどれくらい定着しているかという言葉の定着度の調査について、専門家の判断をどれくらい客観化するということが非常に難しく且つそこが押さえどころと思う。自治体でもかなりその種の調査が行われており、そういうのも参考にするのがよい。

例えば物理に関連してのエネルギーという言葉はもう換えないほうがよいと思うが、普通の会話の中で「エネルギーを発揮して」という時は和語でやったほうがよいということもある。その意味で単語単位から文脈を用意して用法に配慮する、文脈に一步入り込むという仕事が今度の大きな課題であろう。

外来語が動詞として使われている時はたいへん危険だと思う。日本語の文脈の中で「～する」という形のときは、これは一回洗い直さないといけない。昨今の「ゲットする」などはその最たるもの。

「全文は 新聞のホームページに掲載します。」としたところ、主にお年寄りからの問合せで「なんページのことですか」「家庭面かと思って探したがなかった」というのがかなりあった。類推のきかないところに外来語の難しいところがある。一方「ホームページはWebページの最初のページのことをいうのであって全体を指しているのは間違い」との指摘もあるなど、ホームページ一つとってもこれだけ理解の差、考え方の差があり言い換えたところで、今までホームページということを理解している人にとってはかえって分からなくなってしまうこともある。

第22期の国語審議会の外来語の取扱いについての考え方表では、類が定着していると思える語、類と類が定着が十分でない語として分類しており、その間にグレーゾーンがない。調べるとグレーゾーンのところがかなり問題になってきて、ある部分はこのグレーゾーンが定着の方に向かうだろう。ある部分はまだ新語・流行語のたぐいでまた沈んでいくだろうということなのでこのグレーゾーンを考え方としては設けたほうがいい。

最近の日本語の状況を押さえて外来語の氾濫という言葉がよく使われるが、実際に今の日本語の世界で、新聞、雑誌、放送などの中で外来語がどれくらいの割になっているのか。10年単位でいったときにどういう新しい言葉が出てきているのか。国語研究所でこういった調査を行うことが是非とも必要である。

例えば料理の香辛料の名前で豆板醤(トウバンジャン)というのがあるがジャをジアとする表記が出てきている。この二つの音を区別できるのか。また最近漫画などでアに濁点を打っているものがもう普通になっており、無視できない。カタカナで書ける音というものも検討の中に入れる必要がある。

言い換えということは換えることであり「エネルギー」といったときと「活力」といったときはすでに換わっており違う。換えるということを十分意識したうえで外来語を日本語に直す作業を進めなければいけない。

また、翻訳語というのは風土のない言葉であり、第3言語というようなものをつくることになる。第3言語をつくるということにおける我々の精神的な留保というものは非常に大事だということを考えたい。

しかし、たとえばアイデンティティーという言葉、これをどう直してみてもその概念そのものが日本にないからしょうがない。新しい概念を日本人の気持ちの中にも世の中にもそれを植えつけないというふうなことのほうが、むしろ国民にたいするサービスとしてはいいということもある。ただ現象的に対症療法として考えるべきものではなく、もっと基本的なものであるから将来的に恒久的な対応機関として置くべき必要があるといった提言もするといったものでなければならない。

更に外来語というのは上陸してくるわけだから水際作戦性といったことをきちんと考えていく必要がある。

最後に第2次訳語といったようなものがありうるか。明治にdutyを例えば義務と訳した。その時には義ということばが日本人の中でまだ生きていた時代であった。しかたがないから従うということではなく誠意であり倫理的規制力を持っていた。義理と訳されてしまったdutyという言葉は当時では生きていたが、現代ではもう死んでいる。外来語に対する現代の第2次訳語をここで提案することもあっていい。

基本的にわれわれがしなければいけないことは、文化全体に対する日本語のありかたを考えることであろう。

以 上